©2023.2.25 Sapporo Medical University All Rights Reserved.（無断転載禁止）

北海道公立大学法人
札幌医科大学
Sapporo Medical University

札幌医科大学の新キャンパスが完成！

～地域に開かれ、交流の拠点となる大学を目指して～

札幌医科大学は学習・研究環境、診療・療養環境の充実などを図るため、2011年度に策定した施設整備構想に基づき、「今ある価値を活かした新しい都市型キャンパスの創造」をキャンパス計画のコンセプトとして約10年にわたる整備を進めてきました。新キャンパスの落成を記念し、22年11月19日に鈴木直道北海道知事をはじめご来賓を招き、式典を執り行いました。

当日は野球日本代表「侍ジャパン」の栗山英樹監督による講演会も開催。山下敏彦理事長・学長を交えたトークセッションとともにその要旨を紹介します。

2022年11月19日　札幌医科大学落成記念式典（除幕式）

基調講演

命を使え！「使命」

野球日本代表「侍ジャパン」監督　栗山英樹氏

栗山 英樹氏
野球日本代表
「侍ジャパン」監督

私はファイターズでの10年目を最後のシーズンと考え「刮目相待（かつもくそうたい）」という言葉を選手全員に伝えました。中国三国時代の言葉で、「本気で変わろうとする人は三日間会わないだけでも大きく成長するものだから目を見開いて待ちかまえよ」という意味です。札幌医科大学で学ぶ皆さんには、誰かを助けてあげられる力があり、そういう使命があります。皆さんがその使命のために尽力されること、そして札幌医科大学が日本一、世界一の医療機関、研究施設、大学として発展してくれることを信じています。

最後までやり切る力

監督として北海道で10年間、皆さんの応援をいただき、勉強させてもらいました。野球日本代表「侍ジャパン」の監督の話があったときに、本当に自分でいいのか悩ましたが、日本中の野球ファンやこれからを担う子供たちが夢を持てるような、そんな選手たちを呼ぶことが私の大きな使命の一つだと気付きました。そういう意味で大谷翔平選手（エンゼルス）が参加を表明してくれたのは非常にうれしく思いました。

私がファイターズの監督になる前に、テレビ番組で元プロ野球選手の門田博光（故人）さんと話す機会がありました。門田さんは私と同じように野球選手としては小柄な体格なのに500本以上のホームランを打ちましたが、高校時代は1本もホームランを打てなかったそうです。それで私に「俺と同じような体格だけど、ホームラン打つのを諦めただろう。俺は毎朝5時、6時までホームランを打つためにバットを振った」とおっしゃっていました。私はよく練習するタイプでしたが毎朝5時までバットを振ったかといわれたら、そうではありません。その時に本当にホームランだけ狙って体を鍛えたらホームランを打てたのかなと初めて思いました。努力したらできたのかもしれないのに、今思うと逃げていたのかもしれません。10年間監督をやらせてもらって選手たちを見ていると、それは意外に間違っていないと感じます。何か物事を成し得るには、最後までやり切れるかどうかの力が大きい。私が見てきた選手たちは皆そうでした。

自分のスイッチを押す

ファイターズが日本一になった2016年のクリスマスイブの夜中の1時くらいに、ファイターズの関係者から「クリスマスプレゼントです」と動画がメールで送られてきました。「これが今の大谷翔平です」とコメントがありました。選手たちが今一番自由にやりたいことをやっているはずのその時間に、彼は来年のためのフォーム改造を視野に神奈川の合宿所で一人、バッティングを続けているリアルな映像でした。彼は一番やりたいことや一番うれしいことは何かを常に考えています。つまり彼は大観衆の前でみんなが驚くようなプレーや、チームメートと観客を喜ばすようなバッティングをやりたくてたまらない、そのために努力している時がうれしいのです。自分のスイッチを押すというのはそういうことで、そこの意識が高ければ自然に練習したり努力するということです。

トークセッション

——栗山監督が選手と向き合う上で何かを伝えるときに大切にしてきたことは。

栗山　ファイターズの監督に就任したばかりのころは言葉にすると陳腐かなと思ったこともありましたが、言葉にしないと伝わらないことに気付きました。言葉の使い方やトーン、スピードにも気を付けながら何とか選手に伝えようとしました。でも最後は自分に強い思いがあるかどうかですね。

——山下学長は今の栗山監督の言葉を聞いていかがですか。

山下　学長という立場になると学生一人一人とコミュニケーションを取るということがあまりできませんが、監督の話からコミュニケーションの大切さが分かります。先日ファイターズを引退された斎藤佑樹さんの講演を聞きましたが、監督から声を掛けられ、直接話ができたことが良かったと話されていました。

——選手はけがとの戦いもあります。札幌医科大学ではスポーツ医学の分野も強化していると聞きました。

山下　多くのアスリートが故障に苦しんでいますが、札幌医科大学はスポーツ医学に力を入れ、スポーツ医学センターを設立して医師だけではなく看護師、理学療法士などがチームを組み、総合的にサポートする体制を取っています。

——学生のうちから一緒にチームで学ぶのでしょうか

山下　札幌医科大学は特に地域医療を大事にしているので、将来医師を目指している学生と看護師や理学療法士、作業療法士を目指している学生が、一緒に地域の住民と触れ合うことに低学年から取り組んでいます。チーム医療という意識を高く持てると思います。

——北海道にそういうチーム医療を進めている医療機関があるということはプロスポーツチームにとって心強いと感じますか。

栗山　トレーナーなども含めトップレベルの医療体制ができれば、どの選手もそのチームに行きたいと考えるし勝敗にも直結するはずです。コストの問題もありますが、これからは絶対必要になるでしょう。

山下　北海道はファイターズをはじめプロチームも活躍していますし、北海道出身のオリンピック選手も多いので、幅広くサポートしていきたいと札幌医科大学は力を入れています。またトップアスリートをサポートするということは、道民の医療にも生かせると考えます。

——大谷選手がワールド・ベースボール・クラシック（WBC）出場の意思を表明するときに、「栗山監督にお伝えさせていただきました」とSNSに書かれていましたが。

栗山　彼らしくきちんと電話をしてきて、「正式に出させていただきますのでよろしくお願いします」ということでした。今、野球や他のスポーツも少子化の影響を受けています。そういう意味でも、子どもたちが夢を持てるような選手の参加が重要。苦しいのは分かるが誰かのためではなく、野球のために出てほしいと本人には話しました。

——栗山監督は札幌医科大学にどんなことを期待したいですか。

栗山　これだけの施設と良い環境で学生さんたちが頑張っているのを見ると、野球選手が引退後ドクターを目指し、体のことをより理解できる医師になれたらすごいと思うし、そんなアスリートを救える医師はスーパーヒーロー・ヒロインだと思います。北海道からダルビッシュ有（パドレス）や大谷翔平みたいな選手が飛び立っているので、札幌医科大学で学ぶ皆さんが活躍してさらに北海道を盛り上げてくれることを信じています。

山下 敏彦
札幌医科大学
理事長・学長

聞き手
室岡 里美
HTB北海道テレビ放送
アナウンサー

藻岩山を望む都市型新キャンパスで、人々の命と健康を守るスペシャリストを目指す！

教育研究棟

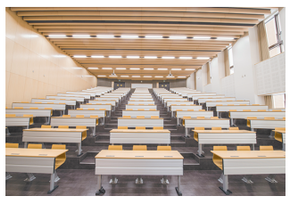
教育研究棟は、講義室、演習室、研究所とその教員室からなる、10階建ての棟です。広く開放的なアトリウムやラウンジを設け、学生は講義以外でも学びに集中したり、コミュニケーションを交わすことができるスペースとなりました。

開放的なアトリウム

低層階は開放的なアトリウム空間となっています。上層階には34室の医学部演習室や、医療人育成センターおよび附属フロンティア研究所の教員室、研究室があります。

クリニカルシミュレーションセンター

トレーニングマネキンをはじめとするさまざまなシミュレーターを用い、基本的な技術学習や模擬体験などを通じて臨床技能を高めるためのシミュレーションセンターです。


共用講義室

約250名を収容でき、医学部、保健医療学部の両学部の合同授業が行われます。また、明るく広々とした講義室は、各種イベントも開催されます。

新キャンパス広場「らてす」

大学と附属病院の間に位置し、多様なアクティビティーを受け入れる緑豊かな憩いの共通空間です。広場の愛称は、公募により『らてす』に決定しました。

学生ラウンジ

木のぬくもりあふれる学生の自習や交流の場です。光が差し込む明るい雰囲気で、コンビニ、書店も併設しています。

保健医療学研究棟

保健医療学に関する施設が中心となった6階建ての棟で、敷地の南側に位置します。実習室や演習室の拡充、また、ナーシングシミュレーションラボを新設しました。

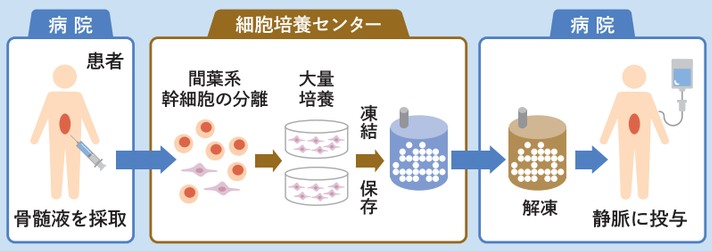
見てわかる札幌医科大学

2022年11月に新生・札幌医科大学のプロモーションビデオを制作いたしました。札幌医大の魅力や生き生きとした学生の姿をぜひ、ご覧ください。

札幌医科大学最新トピックス

再生医療で世界をリード！

治療のイメージ



2018年12月、ニプロと札幌医科大学が共同開発した脊髄損傷を対象とした再生医療等製品「ステミラック注」が、世界で初めて実用化されました。この治療法は患者さん本人の骨髄液から間葉系幹細胞を抽出して大量培養し、点滴で体に戻すことで神経の再生を促す画期的な治療法です。患者本人の幹細胞を使うことで再生を誘導し、高い治療効果が期待できます。

世界初！大腸がんの国産ロボット手術

国産手術支援ロボットによる大腸がんに対する世界第1例目の手術を実施。消化器外科領域の手術に新たな手術支援ロボットが使用可能となりました。

2センターの新規設置

感染症医療従事者の教育・支援組織として、「感染症医療教育・支援センター」を道内で初めて設置。また、研究活動の活性化と未来に向けた戦略的推進を図る司令塔的組織として、「先端医療研究推進センター」を新たに設置しました。

スポーツ医学の取り組み

JOCなどとの連携のもと、大学病院という特徴を生かし、整形外科、内科、リハビリテーション科、婦人科の医師のほか、理学療法士、薬剤師、看護師の参画により、「スポーツ医学センター」を組織し、国内でも少ないスポーツ医学トータルサポート体制を構築。（2022年北京冬季オリンピック、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会などにおいて、メディカルスタッフとして活動）

新型コロナウイルス感染症への対応

[コロナ患者の受け入れ]

2020年2月に、附属病院において感染症への対応としてPCR検査を開始、北海道・札幌市の依頼を受けて、同年3月から重症・中等症のコロナ患者診療にあたっています。重症患者への対応としては、附属病院の高度救命救急センターが、北海道のECMO（体外式膜型人工肺）対応センターとして、道内のECMO治療を中心となって取り組んでいます。

[人的派遣]

札幌市保健所に医師を派遣し、入院調整等の業務を実施、また、宿泊療養施設にも医師を派遣し、診療支援を実施するとともに、北海道のワクチン集団接種会場への人的派遣も実施しています。

[ECMOカーの導入]

コロナ患者等の重症者の命をつなぐ最後の砦ともいわれるECMO（体外式膜型人工肺）を患者に装着したまま搬送が可能な大型救急搬送車「ECMOカー」を、2021年10月に道内初導入。救命率の向上や後遺症の軽減が期待され、「動く集中治療室」として、全道域の病院間における患者搬送などで活躍しています。

企画制作／北海道新聞社営業局